

EDO-TOKYO MUSEUM



江戸東京博物館

友の会ホームページ開設
http://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO

えど友

No. 9

平成14年
2002
9

江戸東京博物館友の会会報



彩色木棺の蓋の上部(部分)
Roemer und Pelizaeus-Museum Hildesheim所蔵

開館10周年記念 ドイツ・ヒルデスハイム博物館所蔵

【特別展】古代エジプト展

～永遠の美～



友の会特別内覧会は、招待者内覧会に合流する形で7月19日(金)午後6時から開催されました。

冒頭、竹内館長のあいさつでは、「当館は平成5年(1993)の開館の際、古代エジプト文明の特別展を開催して50日間に23万人の観客を集めた。その記録は昨年(2001)のポンペイ展まで破られなかった。今回はドイツ・ヒルデスハイム博物館(正式名称:ヒルデスハイム レーナー・ペリツァエウス博物館)の所蔵品によって、入場者数の新記録を打ち立てたい」、などが表明されました。

次いで、同博物館エレーニ・バシリカ館長のあいさつがあり、この展示のポイントは「バランス」であること、を力説されました。

バランスとひと言でいわれると分かりにくいのですが、おそらく古王国時代からクレオパトラ時代まで、満遍なく、平面的・立体的なものを取り混ぜ

て鑑賞に供するという意味かと思われます。引き続き会場を参観しました。

展示は、美しく幸福な死後の世界を夢見たエジプト人の死生観が主要なテーマとなっており、それなればこそ副題が「永遠の美」であって、「悠久の美」ではないのだと思いました。

エジプトの出土品という巨大なものを連想しがちですが展示品は10cm以下のものが大部分です。小さいものでも神像、絵画、装身具その他美術品としての魅力は尽きず、まさに「珠玉の逸品」ばかりでした。

収集過程における影響か、展示品は165点中の111点が出土地不明です。しかし、この博物館は考古学が目的でなく、古代美術の宝庫として、また古代エジプト文化の宝庫として立派に機能していることは間違いないと感じました。

■古代エジプト展は9月8日まで開催。会員優待案内は8ページ参照。



ハ・イ・ラ・イト

- 本年度活動も後半に向かって、館の行事や友の会事業が続きます。積極的な参加をお願いします。
- 開館10周年記念「古代エジプト展」7/19 特別内覧会レポート
- 新役員のご紹介
- 友の会特別内覧会／セミナー報告
・6/24 内覧会
「発掘された日本列島2002」
・7/30「幕府のしくみと変遷」
・6/15 見学会「江戸城めぐり」
- えど友プラザ―講座体験記など
- 【新連載】ミュージアムショップ
名店めぐり(1) 人形焼「山田家」
- 《事業部会だより》
・9/20 特別内覧会「本田宗一郎と井深大」申込受付中！
・9/27 セミナー「吉原とは、こんな所でした」申込受付中！
- 会員優待のお知らせ――
・特別展「古代エジプト展」
- この会報は、皆さんと一緒に創るコミュニケーション情報誌です。ご意見、ご要望、投稿などをお気軽に寄せてください。

会員継続更新のお知らせ

●手続きはお早めに！

友の会は会員の皆さんで支えられています。会員資格は1年間です。まもなく有効期限を迎える方は更新の手続きをお願いします。

該当の皆さんには「継続手続き書類」が郵送されますので、お早めに手続きをお願いいたします。

* 更新しないと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなります。ご注意ください。

新・役・員・紹・介

前任者退任にともない、5月21日開催の第2回友の会総会で補充選任された新役員をご紹介します。今後ともよろしくお願いします。

会計
鈴木 克之(すずき・かつゆき)



両国から“やらまいか”

東京生活4年目。60年間育った「やらまいか精神」の浜松は、「バタバタとボンポンのまち」であり、戦後復興の、ものづくり起業家の第一人者が本田宗一郎です。この秋には彼らの記念企画展があり、楽しみです。

私は、妻と早稲田大学で「欧州の歴史と文化」を学びながら、今春で10回目の欧米旅行を楽しみました。友の会へも二人で入会しています。

江戸博のある地元両国、墨田区横網に住んでいますが、この地の利でお役に立つなら、“やらまいか”という気持でおります。

運営委員(総務部会長)
井上 邦夫(いのうえ・くにお)



喜び・感動を共有しよう

物質的な豊かさを求めてきた20世紀から、知的豊かさの21世紀へ。最近、そんな声が聞かれます。

そこで、博物館の展覧で江戸東京の歴史や文化、美しい芸術などに触れて、先人の豊かな知恵と心を学び、喜びや感動を皆さまとともに味わ

いたいと思っています。

友の会の発足以来、夫婦で参加してまいりましたが、このたびこの要職を引き受けることになりました。会員の皆さまには、より積極的なご参加とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

喜びと感動 心に育くみて
今日も明日も健やかに活か

江戸東京博物館友の会 特別内覧会(2002/6/24)

【企画展】 発掘された日本列島2002

—新発見考古速報展—

去る6月24日(金)、「発掘された日本列島2002～新発見考古速報」展の特別内覧会が開催されました。この企画展は今年で第8回目となるものです。今回は新聞発表の場に、友の会が合流する形で行われたため、金曜日午前の開催となりました。

まず河合隼雄文化庁長官、次いで竹内館長と、実行委員長の田村晃一氏のあいさつがありました。

竹内館長からは今回41遺跡からの500点が展示されていること、とくに鳥取県青谷上寺地遺跡(弥生)の矢

のささった人骨や脳、長崎県鷹島の海中にあった、絵巻物のみで知られる元軍の「てつはう」、その他が見どころとして例示され、出土した握り飯などを中心に食文化のテーマ展示を加えたことが紹介されました。

あいさつされた3氏とも、旧石器捏造事件の結果、以前、誤った情報を提供したことを、遺憾とされました。しかしこの展示の速報性は重要であり、出土品を速やかに公開してあらゆる分野の研究者の厳しい批判を受けることこそ大切なことと思います。



問題は捏造品が直ちに批判の対象にならなかったことではないでしょうか。今回の展示に関しても、速報を受けた皆が厳しい批判の目をもって見るべきではないか、今私たちは発掘を楽しみ遊びにしていないか、など反省させられました。

なお、この展示は、7月14日(日)までの会期の後、各地を回り、来年1月25日から再び東京の府中市郷土の森博物館で公開される予定ですが、弥生人の脳の実物が見られるのは江戸東京博物館だけとのことでした。

【取材】広報部会・佐藤幸彦

幕府のしくみと変遷

講師 村上 直(法政大学名誉教授)



歴史学を勉強する意義は過去を知るだけでなく、歴史観をもって、未来にどう役立てるかが大切です。

日本の歴史の変遷を見ますと、始めは天皇を中心に貴族や僧侶が活躍した時代から、やがて武士階級が出てきて、貴族政治から武家政治へと変わりました。武家政治は、鎌倉時代から江戸時代の終わりまで約700年続きました。

鎌倉時代は、源頼朝が征夷大將軍になって幕府を創始しました。しかしながら、その半数の武士たちは非御家人と呼ばれました。やがて執権の北条氏が実権を握って(1203)、3代実朝以降の將軍は、飾り物になりました。

室町時代は、足利尊氏が幕府をつくった(1338)のですが、將軍を補佐する管領(斯波・細川・畠山)、侍所(山名・赤松・一色・京極)が実権を握っていて、將軍の力はなかったのです。

●動乱の戦国から「徳川の平和」へ

中央集権の支配権をもとめて戦国争乱の時代が100年続きました。結局、最終的に残ったのが織田信長、豊臣秀吉、徳川家康でした。

織田信長は守護代の家臣から、豊臣秀吉は百姓の倅(せがれ)から天下をとり、戦国時代は家柄ではなく、実力あるものが上がっていく実力社会でした。したがって、特に、秀吉には父親からそして先祖代々仕えている譜代の家臣はいなかったのです。

ところが家康は、三河の松平郷の土豪がだんだん大きくなっていったので、昔からの家来がいきました。家康には3代にわたって譜代の家臣、榊原・本多・大久保・酒井で、のちに徳川四天王といわれる人たちが家康を支えました。

『文会雑記』に「御当家ノ政ハ庄屋シ

タテ也」と記されているように、三河時代に、村方三職(庄屋・名主・年寄)と呼ばれていた庄屋組織を、だんだん直したり大きくしたりして仕上げました。いわば、下から盛り上げて農民を基盤にして江戸時代をつくり上げたのです。

秀吉は、勝手に戦争してはならない、という惣無事令(そうぶじれい)を出しました。無事とは平和のこと。家康はそれを引き継いで、武力ではなく法律で治める、「動乱の戦国」から「徳川の平和」に移っていきました。

「織田がつき羽柴がこねし天下餅、座ったままで喰うは徳川」と揶揄(やゆ)されていますが、家康は戦いも上手で、政治的展望をもっていた人物でした。

元和偃武→武断政治→文治政治へとどのように進展したのでしょうか。家康・秀忠・家光は不安定な時代でした。

元和元年(1615)の大坂夏の陣で豊臣氏が滅びて「元和偃武(げんなえんぶ)」の社会が到来しました。偃武とは武器をおさめて用いないこと、泰平になること。2代秀忠から3代家光のときに幕府のしくみは成立しました。しかし、武家諸法度に少しでも触れると大名を取り潰してしまう、武断政治は続きました。

法律・制度・儀礼・教化によって行われる文治政治になったのは、4代家綱からで、さらに5代綱吉で深まり、6代家宣・7代家継で完成し、それが最高に達するのが8代將軍吉宗の時代(1716～1745)でした。

●大御所と將軍との二元政治

家康は、2年で將軍職を秀忠に譲り駿府に住み、大御所として、商人・学者・技術者・外国人・僧侶を登用し、知識を蓄えて、江戸の將軍・秀忠に伝えました。これが第一次大御所政治。2代秀忠

は、家康の死後、將軍を家光にして西の丸に入る。これが第二次大御所政治で、二元政治は2回行われたが消滅したのは、3代家光の後半からでした。

●幕閣と奉行・代官の政治体制

二元政治を経てようやく3代家光のときに政治のしくみができました。

出頭人(側近)政治から官僚組織に発展して、緻密な幕閣組織をつくりました、今の内閣です。大老(臨時職)・老中・若年寄は政治家で、政策を立案し、制度・法律をつくる。寺社奉行・町奉行・勘定奉行などが、今の官庁・官僚組織です。政と官のバランスがよくとれていました。

参勤交代(1635)で大名は、財政的に大きな負担となり、そして全国の大名約260人を中央集権的に押さえました。

鎖国政策(1639)は、オランダ・中国・朝鮮・琉球との貿易・通信に限りしました。国を閉ざしたわけではなく、外国へ行くことを禁じたのです。

江戸幕府は三権分立していません。大岡越前守は、今の消防署・裁判官・警察官・税務署員を指揮し、政治を忠実に実行する有能な実務官僚でした。

代官は今で言う知事・市長などのことです。有能な代官がかなりいて、地方では開発や地場産業が興ってきました。

享保の改革(1716～1745)、寛政の改革(1787～1793)、天保の改革(1841～1843)などの新たな政策を打ち出して、これを制度化していきました。

●明治維新への道

幕末には、それまでの政治組織ではやっていけなくなりました。

ペリーが来航し、安政以降に新しい組織として外国奉行・軍艦奉行・政事総裁職・京都守護職・陸軍総裁・海軍総裁などを設けました。

名高い西郷隆盛・桂小五郎(木戸孝允)・坂本龍馬らは下級武士か郷士でした。老中阿部正弘はペリーが来航したとき、開国しました。その前後に幕府もかなりの人材を積極的に登用しました。

このように江戸時代は、平和が持続して、政策を組織により実施したことは、もっと評価されてもよいでしょう。

【記録】広報部会・貝森武夫



江戸東京博物館友の会 見学会(2002/6/15)

江戸城めぐり

初の試み、事業部会員がガイド役

6月15日(土)、梅雨模様のなか見学会「江戸城めぐり」が開催されました。この見学会は、事業部会員が講師を務める初の試み。期待も大きく、募集定員45名に対して、80名を越す参加申込みがあった好評の企画でした。

東京駅前に集合した一同は、解説の金本勝三郎さん(写真)を先頭に午前9時半、大手門をめざしてスタート。江戸開府400年に先駆けて、日本一の名城の足跡を訪ねました。

コースは皇居東御苑内を、百人番所→中門跡→富士見櫓→松の廊下跡→本丸跡→天守台→二の丸跡→平河門とほぼ一周。なかでも富士見櫓では、太田道灌の和歌「我が庵は松原つづき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る」が披露されるなど、解説は名調子。松の廊下跡では、「忠臣蔵の80%

は後に歌舞伎や講談でつくられた小説」との話を笑いがはじけるなど、セミナーとは一味違うリラックスした雰囲気を楽しめました。



歴史を聞き入る参加者(中門跡付近)

解説のほか、あちこちのグループで江戸城のエピソードに花が咲いたのも、さすが歴史に詳しい方が多い友の会ならではの見学会。有名な場所だけに何度も来たという方もいましたが、

「やはり解説付きで見られるのはよい」という意見が圧倒的。「現代との対照図があるとわかりやすかった」との声も聞かれました。

アジサイの季節とあって、本丸天守台や富士見多聞のあたりでは紫紺の花が満開。本丸跡についたところから霧雨が降り始めましたが、皆さん満足して11時半ごろ平河門で現地解散しました。参加者は77名。

今回は10月12日、「江戸城 内濠めぐり」見学会が予定されています。

東京にはこうした江戸の名所が数多く残されており、いくつかは散策コースとして知られています。今後とも実施を期待したいところです。

■皇居東御苑は、季節の花が美しいことでも知られ、散策にも絶好です。休園日は、月・金曜日と天皇誕生日、12月25日～1月3日。入場無料。

【文】広報部会・大松駿一

《お願い》

今回、申し込みなしに当日参加された方がいらっしゃいましたが、人数制限などによりお断りする場合があります。

必ず申し込みをしてから参加されるようお願いいたします。



えど友プラザ

友の会会員のページ

●ホームページ〈えど友Web〉が開設されました。

友の会が自主運営します。友の会の最新情報、お知らせ、活動予定や会報〈えど友〉のバックナンバー(Web版)もご覧になれます。会員のHPもご紹介します。詳細はHPを参照ください。アドレスは、<http://www.edo-tomo.jp/>

人形作りを実感 ちりめんおさいくもの講座 黒瀬 雅博

私のお裁縫の記憶は、2つ。小学生時代の思い出にさかのぼります。1つ目は、小学校の家庭科の時間に習っ

たお裁縫。2つ目は、曾おばあちゃんが縁側で日向ぼっこをしながらのお裁縫で、針に糸を通すお手伝いです。

さて、今回のちりめん細工のテーマは金太郎の人形。鯉を抱き上げた勇ましい姿です。参加者に配られたキットの中味は、ピンクや赤のちりめんの綺麗なはぎれや、金太郎さんの顔や綿、黒糸ひと巻き分が入っていて、見ても楽しいものでした。

さあ、開始。ピンクの布を縫い合わせ

始めた時は、ただの布切れを縫っている感じで実感が湧きませんでしたが、綿を詰めていくと、金太郎さんの手、足、背中、お腹と徐々にその姿を表す子供の姿に、人形を作っているという実感が徐々に湧いてきました。

そして、先生が描かれた丸坊主の金太郎の顔をつけて、さて髪はどこに? なんと袋の中にある黒糸ひと巻き分を束ねて、髪の毛を作るというすばらしいアイデア! 金太郎の顔に合

わせて自分なりにカットしていきます。最後に櫛で髪を解きはじめると不思議に愛着が湧いてきました。

次は、鯉。うーん。ちりめんを縫うのも、針に糸を通すのも難しい。子供のころ、縁側で曾おばあちゃんがよく針に糸を通すのに苦労している姿を見て少し不思議でしたが、今になって、ああこういうことだったのかと実感してきました。

さて、鯉も順調進んでいたかに見えましたが、そこへ、先生からまち針が正確でなく、表側と裏側があってないようですと。うーん。がんばってやり直し。

そうした苦労も、また綿を詰める段階になると、吹き飛んでしまいました。でも、少し詰めすぎたかな。皆さんの後片付けを横目でみながら、何とかがんばって縫い終えて完成した鯉。

ふう。しばし、自分の作品をながめます。おや、この鯉は！。やはり、なぜか、自然と自分の体形に似て、鯉というより金魚！？。でも、両方、元気があっているかな。時間切れで金太郎と鯉のつながりあわせは、家に帰ってからの宿題となりました。

教室に参加された方々の楽しい話し声や、時として、針仕事に集中するあまり、しーんと静まり返り、張り詰めた緊張感。見て歩いていただいた先生方のきめこまかなアドバイスに参加者の楽しい笑顔も、教室全体を明るくしてよかったと思いました。



話は変わって、演じられた金太郎に触れてみましょう。当館・江戸ゾーンの足柄山の金太郎は、文化2年(1805)11月、中村座・顔見世興行の浄瑠璃絵看板に出ています。またその母、山姥も描かれています。演ずる役者は山姥に3代目坂東三津五郎、金太郎に5代目岩井半四郎です。

この時の半四郎は、眼千両役者と評判の女形として役者絵にも登場しますが、ここでは怪童丸(金太郎)という荒事も演じています。というのも、4代目半四郎は、5代目市川団十郎の弟分で、若

女形にして市川家の荒事を演じることができたそうです。

*当講座は2002/3/16-17に開催されました。本誌第7号参照。



牡丹唐草に彩色 江戸手描友禅講座 高沢 金吾

戦後しばらくは神田駅のホームから東の紺屋町の方を眺めると、染物屋の干場がよく見えて、染布がひるがえっていましたが、今はすっかりビルが建って名ばかりの紺屋町になってしまいました。

江戸の染物というと、やはり小紋が知られていますが、このたび友の会で手描き友禅染めの体験講座のお知らせがあったので、珍らし物好きの虫が目をさまし、挑戦することにしました。当日の参加者のなかで男性は私一人でした。

今回は友禅染の絹のロングスカーフをつくるということで、北鎌倉で工房を開いておられる佐藤平八先生のご指導で、博物館所蔵の資料の中から図案を5つ用意していただきました。桜・牡丹唐草・波・都忘れ・なでしこ。この中から各自好きな図案を選択することになり、私は牡丹唐草を選びました。

我が家の庭には毎年たくさんの牡丹が咲くのと、図案の中でいちばん複雑で手間がかかりそうだったので、せっかく挑戦するなら…と選びました。

幸いにも、佐藤工房で下絵・糊置きまで事前に行われていたので、当日は彩色だけでよいことになり、たいへん助かりました。とくに糊置きは「作品が生きるも死ぬも糊次第」といわれるほど、熟練の技が要求されるそうですが、すばらしい糊置きをしていただいていた、未熟な私が色をさしてよいものか心配

になるくらいでした。

手描き友禅の工程は、(1)図案づくり、(2)下絵、(3)糊置き(糸目糊)、(4)彩色(さし)、(5)中埋め、(6)地染め、(7)本蒸し、(8)友禅流し(水洗い)、(9)湯のし——となります。

彩色は日本画用の顔料を用い、滲み止め液と混ぜながら色をつくり、淡い色から濃い色へと、糊置きの際からはみ出ないように丹念に描きます。牡丹の花弁は淡紅色にして、濃紅色を入れてボカシの技法をていねいに指導していただき、何とかまとめることができました。

このあと、彩色した模様の上に糊を施す中埋めの作業以降は、佐藤工房で仕上げて下さるとのことです。果たして思ったような作品に出来上がるのか待ち遠しく、楽しみにしています。

今回の講座を通じて貴重な体験を得ることができ、参加の皆さんの和やかな雰囲気の中、伝統工芸のすばらしさ、奥行きの一端に触れることができました。企画された事業部会の皆さまありがとうございました。

*当講座は2002/3/23-24に開催されました。本誌第7号参照。



上野東照宮を訪ねて

野坂 紘子

石段を登って石の鳥居をくぐる。古ぼけた石灯籠が両側にずらりと並んで、お侍さんたちが供奉しているようにも見える。青葉が美しい。参道に入ったとたん、タイムマシンは300年くらい昔に連れていってくれる。

私の大好きな唐門が目の前にさほど武ばった様子でもなく、霊廟を守って立つ。お賽銭を投げて鈴を振れば勝ち残り組になる、とは書いてなかった

が、なにかしらご利益はあると思う。

家康さんにご挨拶して、じっくりと眺めよう。右に登り龍、左に下り龍。いわずと知れた左甚五郎。こんなに間近で見られるなんて、私はいつも感激する。

落語のなかの左甚五郎氏は竹で水仙の花をつくり、水にいけるとほのぼのと咲きそめる。あれはお大名にいくらで売れたのだった。この龍2匹、いったいいくら？ さて、料金300円を払って透塀の横を歩く。本殿もこの塀も慶安4年(1651)、将軍家光によって改築されている。

上下に彫刻があるが、作られた当時は金箔塗りで極彩色だったそう。今は予算の関係で赤く塗られているだけ。でも、私は何度見ても見飽きないほど好きである。

建物の鳳や、門の獅子や牡丹は、さすがに格調があつて厳格な感じもするが、この鼠、鹿、猿、小鳥、水鳥、紅葉、菊、お米、300枚あまりの彫刻群はひたすら穏やかでやさしい。

ぶっくらと無花果のような形の果実、モダンなマーガレットのような花など、時を感じさせないほど新しい感覚。かえって色づけされてないのが好ましい。伯父が出来たての荷車をビンガラで赤く塗っていたのを思い出す。

幼いころ、木っ端のなかで育ったせいか、木の物には郷愁がある。もちろんこれは最上の職人さんたちの仕事で

はある。ちょっと行くと悪狸を祭った小さなお社もある。「他を抜く」とかで、お参りされる方が多いそう。どうしても先んじたい方は、ここでもご参拝されるとよい。

年代物の回廊をゆっくりと歩いて中に入ると、本殿の中は黒漆で塗られて、静かでほこりっぽい。正座すると背筋がずっと伸びる心地がする。いつ、どんな方々が参拝したのかと想像するのも楽しい。

ちょっと陰気な大きな雛壇のような所で、右大臣・左大臣もひかえている。狩野派の立派な唐獅子があつて素晴らしいのだけれど、いかにせん、埃まみれでみすばらしい。びっくりするほどきれいじゃなかったのだが、きょう来てみると真新しい赤い絨毯なんか敷いてあつて、少し小奇麗になっていた。

家康公の鎧、秀忠や慶喜さんらの書画などもある。これも意外と趣深いもので、以前に見た明治の元勳たちの雄渾な書とは大きな違いがある。なんか地味で、天下を取って江戸を開いた一族の人たちにしては何故かやさしいのが不思議だと思う。

建物自体は細部までいちいちゴージャスで、なかなかドキドキもする。この静かな空間に下々の私が入らせていただけるのは、もち嬉しいが、前よりきれいになったのが残念。汚い時の方が荒れ果てた霊廟で、じかに家康公にお会いしてる気がしたのだけれどね。月の美しい夜に、誰かに笛でも吹いてもらってここにいてみたい。

300円はお得。上野にいらした時はお寄ください。私は帰りがけ、咲きごろの牡丹というおまけもありました。こちらの料金は500円なり。赤い牡丹、白い牡丹、桃色牡丹……。甘い物が好きなら鶯団子を。クラシックな極上のサービスでお食事なら精養軒へどうぞ。さて、では一句。

緋ばたんの蕾の中の冥土かな

紘子

セルロイドの思い出

佐藤 幸彦

♪青い目をしたお人形は、アメリカ生まれのセルロイド……

野口雨情作詩、本居長世作曲(1923)の童謡です。

セルロイドは1860年代の終りごろ、アメリカ人ジョン・ハイアットが発明したもので、植物繊維と樟脳を原料とした、プラスチックの草分けとも言えるべき材料です。1930年代から1950年代にかけて石炭系・石油系のプラスチック材料が開発されて黄金時代を迎えるのですが、セルロイドは常温で硬くて変形しにくく、加熱すると成形が容易で、また美しい色が出せるので、かつては非常に普及したものでした。着火すると激しく燃えるのが問題点でした。

昔の家庭の暖房は火鉢とか練炭ストーブが多かったので、私達の親はそのそばでセルロイドの玩具で遊ぶことを厳しく禁じていました。もちろん子供も気をつける癖はついていたのですが、つい火鉢のある場所でセルロイドの玩具の投げっこなどをして、火事のもととなることもあったのです。

昭和7年(1932)12月に白木屋百貨店(元東急百貨店日本橋店)で大きな火事があり、死者14人、負傷者67人という惨事になりました。この火事の女性下着ファッションへの影響はしばしば話題にされるのですが、ここではセルロイドとの関係を話しましょう。

火事の原因は、同店4階の開店前の点検でクリスマス用の豆電球の故障を修理しようとして、電線が誤ってソケットに接触し、そのスパークが飛び散って着火し火災になったのだそうです。4階は玩具売り場で、恐らくセルロイド製玩具が山のようにあったことと思います。

それにしてもこの火災原因の説明



上野東照宮 石灯籠

寛永8年(1631)、佐久間勝之が奉納。高さ6.8mで京都南禅寺、名古屋熱田神宮の灯籠とともに我が国の三大灯籠と呼ばれている。俗称おぼけ灯籠。(写真筆者)

は、技術者としての私には納得が行かないのですが、当時は、そのような説明で片づいたのでしょう。とにかく出火した4階から上、8階までが丸焼けとなり、死傷者はすべて4階から上にいた人々でした。

この火事は高層建築の設計と防火に大きな問題を提起するとともに、以後、各デパートは玩具売場を最上階(食堂)の次くらいに配置するようになりました。この習慣は最近までわりあい固く守られて来ました。玩具は6階か7階に、というわけです。玩具の材料としてセルロイドが如何に主流であったか、白木屋の火事が如何に衝撃的だったかを物語るものです。

セルロイドの大きな用途として、写真や映画のフィルムがありました。今は不燃性の、セルロース・トリアセートという材料に改良されています。

1984年9月3日、京橋の国立近代美術館のフィルムセンターが火事になり、

～テーマ特集～「私と明治・大正」 お気軽に投稿ください！

テーマ特集には多くの投稿をいただいています。

新しいテーマは「私と明治・大正」。明治・大正期の歴史や文化、暮らし、町の話題、趣味や関心事、疑問質問など、“あなたと明治・大正”に関連した事柄をご寄稿ください。続編として昭和戦前編も予定しています。

◆テーマ投稿要領

短文(表題も)を、手紙かハガキ、HPからメールで投稿。イラスト・図版や写真も歓迎。採用分には記念品進呈。応募締切:9月末日。会員番号、〒住所、氏名、年齢、電話番号を明記。友の会事務局「投稿」係あて。

多くの貴重な映画を焼失しました。フィルムは1950年代から不燃化されているのですが、古い映画フィルムはセルロイド製なので、冷房節減のために電源を切っていたら自然発火してしまったということです。

いろいろな機能を持ったプラスチック材料が開発されているのに、セルロイドは健在です。第1は卓球のボール。これはセルロイドに限ります。

そして床屋さんの櫛、楽器ではギターのピック、ピアノやアコーディオンの鍵盤など。鍵盤は象牙が最高ですが、今は象牙の使用が厳しく制限されています。

そう言えばセルロイドはもともと、ビリヤード球の材料として使われる象牙の代替品として、開発された材料でした。

なお「セルロイド」は元来アメリカの会社の、商品名です。

江戸東京博物館ミュージアムショップ 名店めぐり〈1〉

蜂蜜が自慢 人形焼「山田家」

江戸博1階のミュージアムショップには、江戸東京にゆかりの品がいっぱい。その中からお土産に喜ばれている老舗をシリーズでご紹介しましょう。



本所七不思議の楽しい包装紙と、可愛い狸の姿の人形焼き。日持ちがよく、手頃な値段とあって、ミュージアムショップの菓子類の中では売上げベストスリーに入っているとか。

錦糸町の山田家本店を訪ねると、美味そうな匂いの流れる応接室で、会長の山田実さん(写真)がにこやかに取材に応じてくださいました。

昭和21年(1946)の創業。もともとは千葉で養蜂業をなさっていて、餡や皮をつ

くるとき良質の蜂蜜をふんだんに使えたことが、店の発展につながったといわれます。当時は終戦直後で、すべての物が不足していた時代。そんな中で、甘いお菓子はだいに喜ばれて、お客様に評判になったそうです。

山田家さんの人形焼の美味しさは、皮にあるといえます。そこで、その秘密を伺うと、「一言でいえば、小麦粉・砂糖・蜂蜜の比率が3・3・3ということですね」と山田会長。つまり、蜂蜜の分量が多いことが、ご自慢でした。

ところで、山田家本店の所在地は、あの「おいてけ堀伝説」の跡地。江戸中期までは実際に堀があったのが、その後埋め立てられて大名屋敷になったといわ



会長の山田実さんと錦糸町の本店(右)
東京都墨田区
江東橋3-8-11



れます。

包装紙のデザインも、狸の姿も、この話によっています。創業のころ、友人の宮尾しげを画伯に頼んで描いてもらったもので、店のトレードマークとして今や半世紀を越えて使用中。これからも味とともに大切にしていきたいと、おっしゃっていました。

山田会長は毎朝7時には近くのお宅から、自転車通勤。インタビューを終えた後、軽々と自転車をこいで帰って行かれるその背には、長年お店を続けてこられた自信が感じられました。

【取材】広報部会・岡橋園子

事業部会 だより

友の会セミナー

第8回「吉原とは、こんな所でした」

講師：福田利子・清一氏（松葉屋経営）

・開催日：9月27日（金）18:00～19:30 ・申込締切：9月16日（月）必着

・会場：江戸東京博物館・1階会議室

・定員：100名（会員本人に限る） ・参加費：200円（当日払い）

江戸初期に始まり、昭和32(1957)年まで、340年間にわたって賑わった吉原。それは日本の代表的な歓楽地であつたと同時に、一種の社交場で

もあり、江戸東京の文化や風俗に大きな影響を残しました。今回は、かつての遊郭「松葉屋」の女将から、ご子息の清一氏とともに、昭和の吉原に伝

えられた文化や習慣など、知られざる花街の世界をお話しいたします。

講師略歴：ふくだ・としこ

新吉原で遊郭「松葉屋」を経営。作家・久保田万太郎氏のすすめで花魁道中を復活したことで知られます。今ではなくなりましたが、「はとバス」の「夜のお江戸コース」でご存知の方もおられるでしょう。著書に『吉原はこんな所でした』があります。

特別内覧会

開館10周年記念

【企画展】本田宗一郎と井深大 展

～夢と創造～

開催日時 9月20日（金）18:00～20:00

（受付開始 17:30）

会場 江戸博・1階ホール/企画展示室

参加費 500円（会員・同伴者とも。当日払い）

申込締切 9月12日（木）必着

同伴者 2名まで可。氏名をハガキに連記。

申込受付中

講座受講 申込方法

申込方法が
変わりました！

●普通ハガキでの申込に変更します。返信連絡はいたしません。申込者は当日、受付で登録ください。事前申し込みがないと受講できません。必ず申し込みをしてからご参加ください。

▼申込方法：

普通ハガキに《開催日「テーマ名」応募》と、

①会員番号②氏名③〒住所④電話番号を明記。会報、友の会のご感想・ご要望もどうぞ。

・各講座ごと、1人1通。

▼申込先：130-0015東京都墨田区横綱1-4-1

江戸東京博物館友の会事務局あて

▼締め切り：各講座案内を参照（必着）

●お知らせ● 古文書講座

入門編・第3回目、9/11（水）は14:00～16:00

初級編・第3回目、9/25（水）は17:00～19:00

会員優待のお知らせ

【特別展】開館10周年記念
ドイツ・ヒルデスハイム博物館所蔵

古代エジプト展

—永遠の美—

好評開催中！ 9月8日（日）まで【月曜日休館】

会員：一般 650円、65歳以上320円、大専門生520円

同行者：一般1,040円、65歳以上520円、大専門生830円

◇図録◇ 会員価格1,620円（定価1,800円）会員証提示

活動に参加しよう 各部会員を募集！

事業部会：事業の企画・運営、広報部会：（えど友）の編集・PR活動、総務部会：各種案内の発送・受付
ハガキに、希望部会名、会員番号、〒住所、氏名、電話、応募事由、を記載して、事務局までご応募ください。



次号は11月1日発行予定です。

<http://www.edo-tomo.jp/>

江戸東京博物館友の会
会報「えど友」第9号

発行日 平成14年（2002）9月1日

発行 江戸東京博物館友の会事務局

130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1

Tel. 03-3626-9910

編集・制作 友の会広報部会

発行・編集人／佐山彪（事務局長） 編集主幹／大松駿一

編集／岡橋園子、菅沼和男、佐藤幸彦、貝森武夫

レイアウト／巻瀾彰